

DENOTAME SITE

デーノタメ遺跡

第1次調査～第4次調査・内容確認調査

〈概要版〉



2019

北本市教育委員会

I 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経過

デーノタメ遺跡は昭和44年ごろ、当時の北本市内で実施された埋蔵文化財包蔵地の分布調査において発見された遺跡である。遺跡は大宮台地を開析する江川上流の支流に位置しており、昭和44年に日本住宅供給公社による北本団地が造成されるまでは、遺跡の低地部に「デーノタメ」⁽¹⁾と称される湧水起源の溜池が存在していた(図1・2)。デーノタメ遺跡はこの「デーノタメ」の周囲に展開しており、分布調査を担当した吉川國男氏は「この立地環境で特筆しなければならないことは、ここにはきわめて強力で豊富な地下水の湧出があることである。一年じゅう台脚下から水音をたてて噴出している湧水である」と紹介し、遺跡における「デーノタメ」の重要性にちなんで溜池の呼称を遺跡名としたのである。

指定当時のデーノタメ遺跡は溜池南側の低台地に位置するデーノタメⅠ遺跡と、南東部の台地上に位置するデーノタメⅡ遺跡の2遺跡が認識されており、前者では土師器を伴う古墳時代の遺物包含層、後者では縄文時代の後期堀之内期を中心とする集落跡の存在が想定されていた。ところが昭和63年、デーノタメⅠ遺跡内においてムロ穴を掘削した際、縄文時代中期の勝坂式土器がまとまって出土したことから、にわかに縄文時代中期の集落跡の存在が注目されるようになった。

その後、市教育委員会は平成9年度に国庫補助事業として実施した市内埋蔵文化財包蔵地の詳細分布調査の成果により、デーノタメ遺跡Ⅰ・同遺跡Ⅱ及び榎戸Ⅲ遺跡を「デーノタメ遺跡」(No.16-039)として統合し、さらに範囲を拡大して現在に至っている。

一方、北本市は都市近郊の住宅都市として人口が増加し、本遺跡の周辺では小規模な宅地開発によってスプロール的な市街地の形成が進むことが懸念されていた。こうした中、北本市では道路・公園・その他公共施設の整備改善を行い、良好な市街地の形成を目指し、44haと大規模な「久保特定土地区画整理事業」(平成9年2月認可)が計画されたのである。

この区画整理事業地の北西部にはデーノタメ遺跡が所在しており、とくに遺跡内には広域幹線の都市計画道路「西仲通線」及び「南2号線」が交差し、約7,200㎡の遊水地が計画されるなど、当該区画整理の重要施設が集中するエリアとして計画されていた。

このため、市教育委員会では久保土地区画整理事務所の依頼を受け、平成10年の区画整理地内の西側街区部分を中心とする遺跡の範囲確認調査を皮切りに、埋蔵文化財の調査に着手したのである。



図1 元禄の絵図に描かれたデーノタメ



図2 デーノタメ遺跡周辺の低地 (昭和44年)

第2節 調査の経過

平成10年度の範囲確認調査は、遺跡の西側に位置する都市計画道路「西仲通線」及び西側街区の道路部分を対象に実施した。その結果、縄文時代中期の勝坂式期～加曽利E1式期を主体とする広汎な集落跡が確認されたため、区画整理事業における埋蔵文化財への影響が大きく、遺跡の保存について協議が必要である旨を北本市長あてに通知した。

その後、北本市教育委員会と北本市において遺跡の保存を前提とする調整を行ったが、すでに「西仲通線」「南2号線」は都市計画決定の認可を、区画整理事業も施行認可の公告を受けており、計画を変更することは困難であると判断されたため、早期に発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなった。

これにより、発掘調査及び出土品の整理については市教育委員会が実施することとなり、第1次調査の面積は900㎡、調査期間は平成12年12月4日～平成13年3月21日と決定した。

なお、引き続き実施が計画された第2次調査は、遺跡内の樹林地でオオタカの営巣が確認されたため、久保土地区画整理事務所ではオオタカの生息調査を5年間にわたって実施し、第2次調査は平成17年度以降に繰り延べることとなった。その後、平成17年度の第2次調査から平成19～20年度の第4次発掘調査及びその後の学術的な内容確認調査の経過については、以下の表1にまとめたとおりである。

表1 デーノタメ遺跡調査一覧

年度	調査期間	調査形態	調査地点	調査成果
平成10年度	2.28～3.21	範囲確認調査	街区道路部分	縄文時代中・後期の集落跡を確認
12	12.4～3.21	第1次発掘調査	西仲通線(900㎡)	勝坂式期～加曽利E1式期等の住居跡7軒
17	9.27～2.15	第2次発掘調査	西仲通線(900㎡)	勝坂式期～加曽利E1式期等の住居跡15軒
19	9.2～11.20	第3次発掘調査	西仲通線(1,500㎡)	加曽利E1～E3式期の住居跡2軒
19～20	2.14～6.30	第4次発掘調査	西仲通線(170㎡)	縄文時代中・後期の低湿地遺跡を調査
20	8.4～8.7	範囲確認調査	調整池	縄文時代中・後期の泥炭層を確認
24	11.13～12.5	内容確認調査	後期集落	縄文時代中・後期の集落を確認
25	10.28～11.20	内容確認調査	中期集落	縄文時代中・後期の集落を確認
27	2.1～3.17	内容確認調査	中期集落	縄文時代中期の集落規模・構造を確認
28	6.7～7.12	内容確認調査	後期集落	縄文時代後期の集落規模・構造を確認
29	10.27～12.5	内容確認調査	中期集落、後期低地	縄文時代後期の泥炭層を確認
30	10.15～11.22	内容確認調査	テラス部	中期と後期の遺物集中等を確認

註

- (1) 地元では「デイノタメ」と発音する場合もある。湧水のことを「デスイ」または「デイ」ともいい、「出水の溜池」の意味であるか、北側に台原(デエツパラ)地区があり、「台原の溜池」の意味のいずれかであろう。

Ⅱ 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の地理的環境

北本市は埼玉県中央部やや東寄りに位置し、市域の大半は大宮台地の北部に展開している。大宮台地は武蔵野台地と下総台地に挟まれており、西の荒川低地と北の加須低地、東の中川低地に画されて島状に独立する。台地の規模は北端の鴻巣市から南端の川口市までは約35km、東西は約15kmで紡錘形を呈し、東側には狭小な小支台が多数分布する(図3)。

この大宮台地の北部に位置する北本市は、本台地において最も標高が高く、市域北西部の高尾・荒井付近では標高が32mを超え、西側の荒川低地との比高差が大きく、また樹枝状に発達した開析谷の侵食によって比較的起伏に富んだ地形を形成する。市域の標高はここから東へ向かって次第に高さを減じ、市中央部の江川流域では約20～25m、東部では約15mと遞減する。このため、台地の東端は台地と低地との比高差が小さく、市域の東西では大きく景観が異なっている。

デーノタメ遺跡は北本市の南部、下石戸下地内に位置し、経緯上の位置は北緯36°0′55″、東経139°32′18″である。遺跡は市を南北に貫流する江川流域の台地部から低地部にかけて広がっており、その規模は東西375m、南北235mである。台地の北西は広大な江川の低湿地が広がり、遺跡の北西部は東西170m、南北80mの規模でテラス状の低台地が湾入しており、かつては湧水起源による沼沢地の跡と想定される。第I章で触れたとおり、この低台地と低地の境界付近には昭和40年代半ばまで「デーノタメ」と呼称される約1,000㎡の溜池が所在しており、こうした湧水による豊かな水環境を特徴とする立地が、この地にデーノタメ遺跡が営まれた大きな理由の一つであろう。

現在、遺跡の台地部分の多くは雑木林、屋敷林、竹林等の山林が占め、原状をよく残しているが、北西の低地部の大半は北本団地

(独立行政法人都市再生機構)として造成され、改変が著しい。



図3 デーノタメ遺跡の位置

Ⅲ 調査の概要

第1節 第1次調査～第3次調査（台地上の調査）

1 調査の概要

第1次～第3次調査は遺跡のほぼ中央部、低地が大きく湾入する屈曲部を北端として、ここから南部へ幅約18m、長さ約150m、総調査面積で約3,300㎡を対象にした。調査はソフトローム層上面を遺構確認面として約40～50cmの厚さで堆積する表土層をあらかじめ除去して行った。その結果、縄文時代の住居跡群は中期の住居跡23軒、後期の住居跡1軒が検出された。土坑は調査区全域で確認されており（図4・5）、時期は中期、後期が混在するが、斜面部の低地に近いエリアに後期の土坑が偏在する傾向にある。また、これ以外に屋外埋甕炉、伏甕（図10・11）なども確認されている。

調査において出土した土器、石器類はコンテナで約130箱におよぶ。これらのうち土器はおよそ勝坂3式期～加曽利E2式期を中心とし、加曽利B1式期にわたる遺物群が大部分であり、他の時代の遺物は少ない。

なお、中世の遺構群が第1次調査区を中心に検出されている。特に大型の地下式坑とその周囲に展開する方形竪穴状遺構群の分布は顕著であり、近世では区画溝、井戸跡等が若干検出されている。



図4 第1次調査区全景

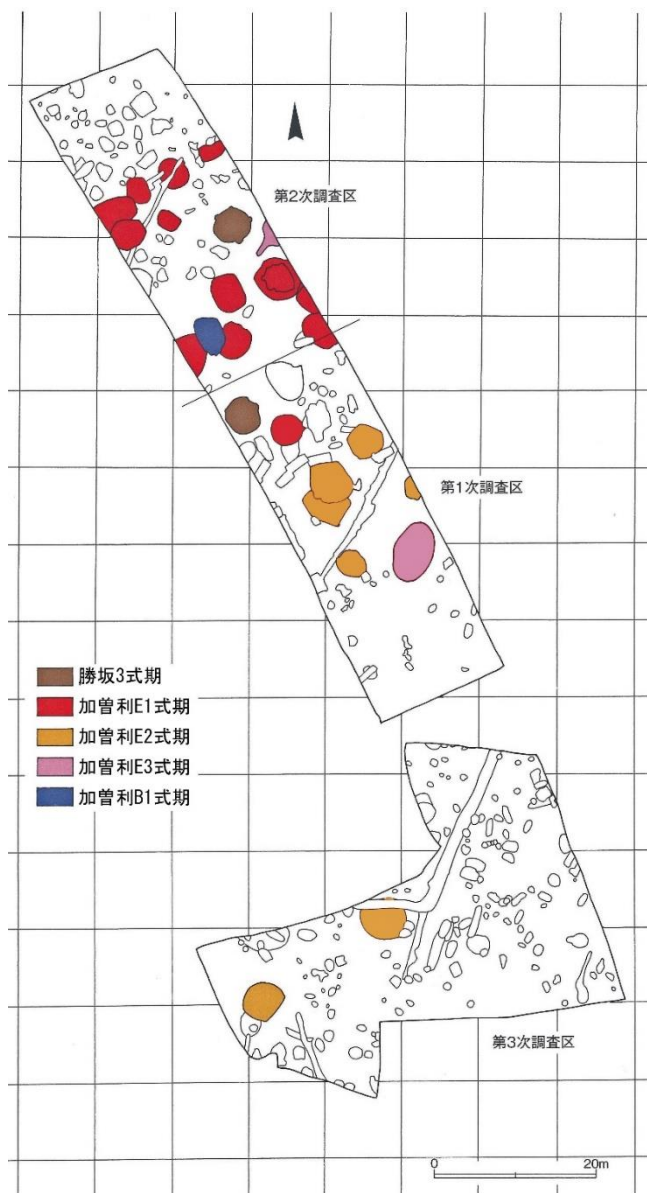


図5 第1次～第3次調査区と遺構分布

2 縄文時代の住居跡の調査

第1次～3次調査によって確認された住居跡群は全部で24軒であり、縄文時代中期後葉から後期前葉にわたる。具体的な時期は中期の勝坂式期が3軒、加曽利E1式期が18軒、加曽利E2式期1軒、加曽利E3期1軒、および後期中葉の加曽利B1式期の住居跡が1軒である。

調査区は北部低地から南部の台地上に向かって緩やかに傾斜し、比高差でおよそ3m標高が増したところで台地肩部に到る。さらに南へ向かうと再び緩傾斜となって標高を減じ、遺跡に南接する浅い支谷へ到達する。住居群の分布は台地肩部から平坦部にかけて密集している状態であり、北部においては低地部へ接する直前まで広がっている様子が窺える。その分布形態は調査区内では弧状を呈していた。

勝坂式期の住居跡は総じて壁高が高い。支柱穴は大きく、その配置に規則性が認められる。また、主体をなす加曽利E1～E2式期の住居群はその形態や規模に差異がみられる構成である。

加曽利E3式期の住居跡は柄鏡形を呈し、また、後期の住居跡も南部に張出部をもつ。

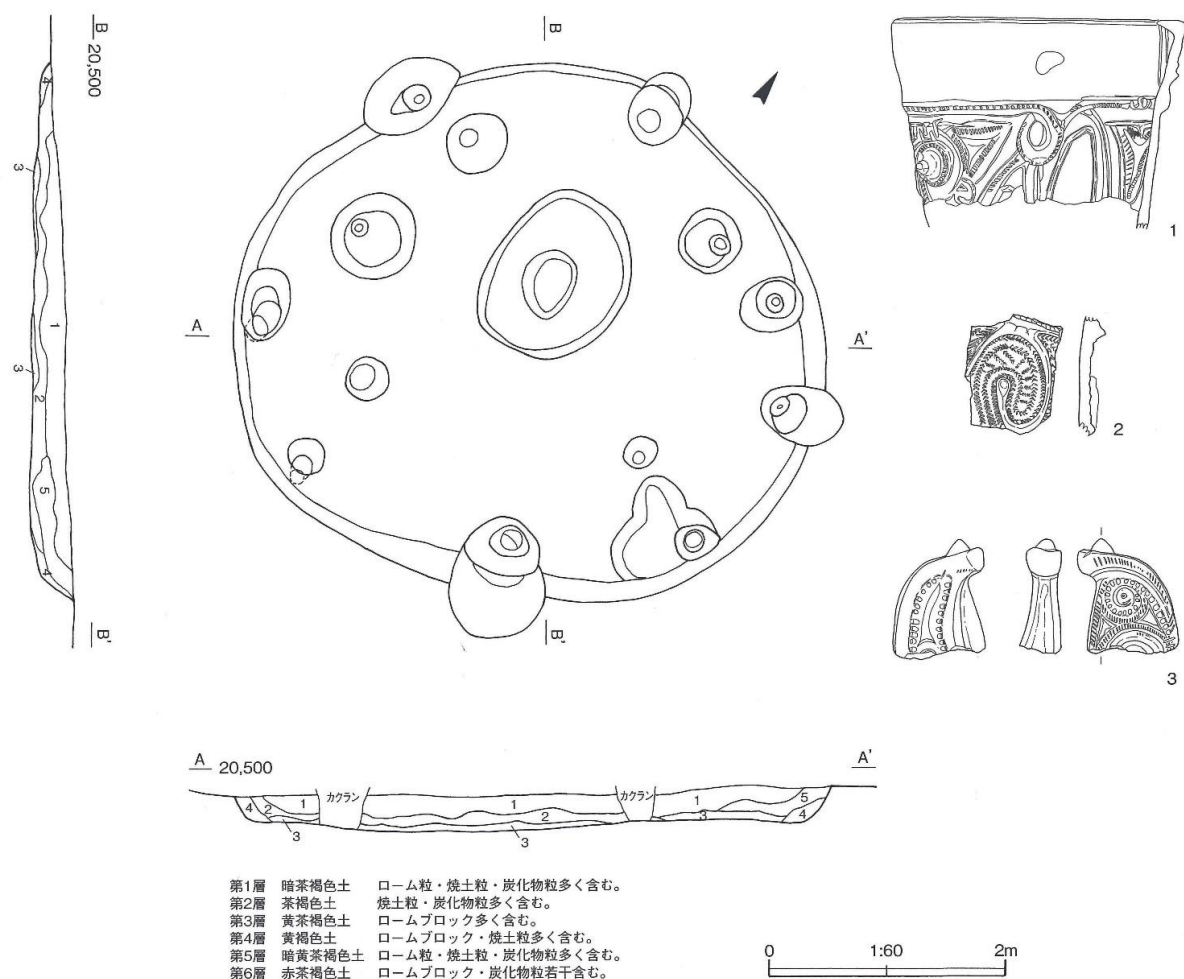


図6 第2次調査7号住居跡

(1) 勝坂式期の住居跡 (図6~8)

勝坂式期の住居跡は第1次調査の7号、8号住居跡と第2次調査の7号住居跡である。それぞれ平面形は円形を呈する。支柱穴はいずれも規則性をもって五角形に配される。

第2次調査の7号住居跡は台地の斜面部から平坦部へ移行する台地肩部に位置するため、壁は南側が高く造られている。他の2軒はやや内陸側の平坦部に分布する。

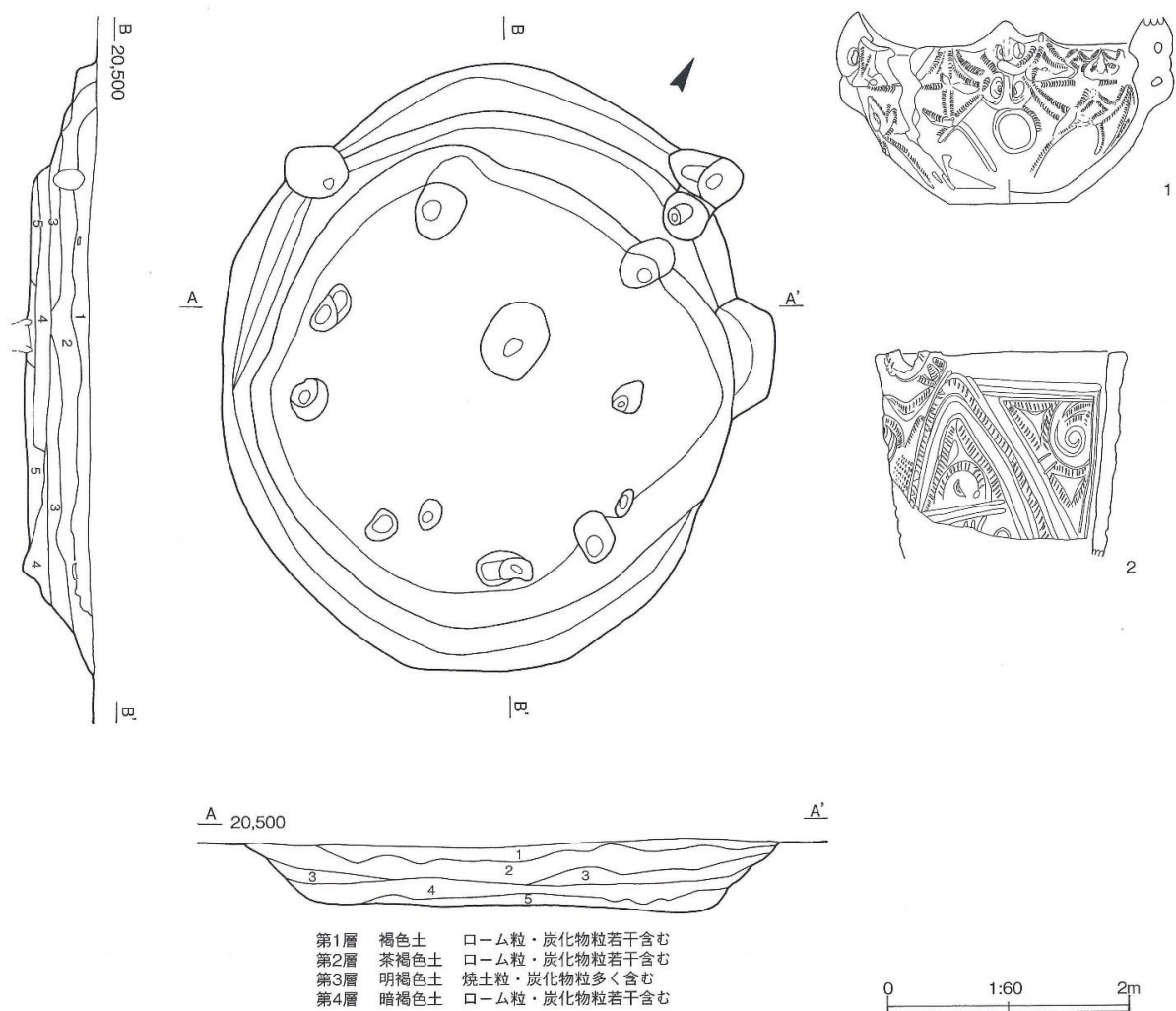


図7 第1次調査8号住居跡



図8 第1次調査8号住居跡出土浅鉢形土器展開写真

第1次調査の8号住居跡では覆土中から正置された浅鉢が出土した。把手部には昆虫、体部には両生類と思われるモチーフが描かれ、内面には赤色漆の塗彩痕が確認されている。また、炉跡には第2次調査の7号住居とともに円筒状の深鉢下半部を打ち欠いた土器を使用した埋甕炉が検出された。

(2) 加曽利E1～E2 式期の住居跡(図9)

加曽利E1～E2 式期の住居跡は、調査区北側の台地肩部から平坦部、南部斜面地まで分布が広がっている。住居跡の平面形は円形、楕円形、隅丸方形に近いプランなどが混在している。その中で、第1次調査の1号住居跡は形状が楕円形を呈する大型住居で、その長径は約8.1m、幅5.5mを測る。壁高はそれほど高くなくおよそ10cmである。支柱穴と考えられる柱穴は六角形に配され、それぞれが径70mm、深さ1.0mを超える。

第2次調査の4号住居跡は同様に楕円形を呈する小型の住居跡であり、長径はわずかに約3.5m、幅2.5mである。第1次調査の1号住居跡と比較すると面積比で約1/4程度の広さとなる。ただし、住居の規模に比して炉跡が大きく、大型の炉体土器が据えられており、特殊性が窺える。

第2次調査の8号、10号、16号住居跡は東西方向に近接する住居跡であるが、いずれも住居廃絶後の埋没過程において土器の廃棄行為が顕著に認められた。この特徴から3軒の住居跡はグルーピングが可能で、集落内における廃棄エリアとしての機能が想定できる。

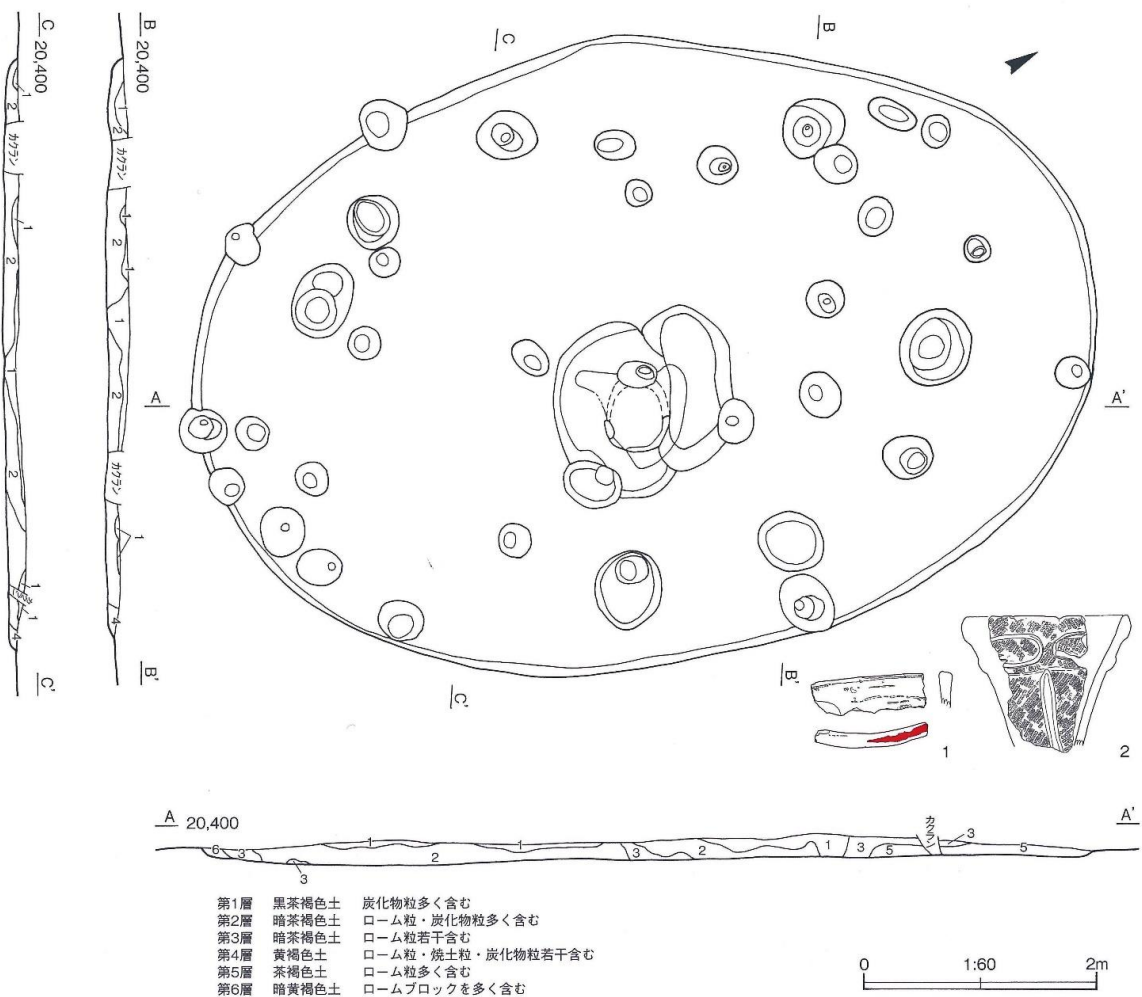


図9 第1次調査1号住居跡

3 遺 物

(1) 土器・石器 (図10~15)

住居跡を中心に多量の遺物が出土しており、土器は炉体土器に優品が目立ち、大型の深鉢を使用する住居が多い。勝坂式期の住居跡から出土する把手類には蛇体文、獣体文と思われるモチーフを多用する様子が窺える。また中期の土器では漆を塗っていたであろう無文の浅鉢の検出も多い。

石器類では打製石斧、石鏃、石皿、磨石、敲石など様々な器種が出土している。



図10 伏鉢



図11 伏鉢内部遺物検出状態



図12 第2次調査7号住居跡炉体土器



図13 第2次調査16号住居跡炉体土器



図14 第2次調査3号住居跡出土石鏃



図15 第2次調査3号住居跡出土石斧

第2節 第4次調査(低湿地の調査)

1 第4次調査の概要(図16・17)

第4次調査区は遺跡の北部に位置し、台地直下の低湿地部が対象である。原状は都市再生機構（UR）の遊水地として機能しているエリアで、面積は170 m²である。調査に際しては重機で表土を除去し、調査区の周囲に排水溝を掘削した後、ポンプで揚水しながら遺物包含層及び遺構を掘り下げ、粘土質の基盤層まで調査を行った。調査区のほぼ全面には黒褐色の草本泥質層（Ⅰ層）が覆っており、以下、茶褐色の木本泥炭質層（Ⅱa・Ⅱb層）、灰褐色砂層（Ⅲ層）、基盤層である黒褐色粘土層（Ⅳ層）、青灰褐色粘土層（Ⅴ層）と堆積している。このうち、縄文時代中期の生活面はⅡa層～Ⅲ層まで、約40～50cmの層位である。

調査区はデーノタメから流れ出した流路の一部と想定され、この窪地を中心に縄文時代中期中葉から後葉のⅡa～Ⅲ層が堆積し、クルミ塚、砂道跡、溝跡等の遺構のほか、各層位から漆塗土器を含む土器類が多量に出土している。また、調査区南部の支流部分では、主として縄文時代後期前葉から中葉の泥炭層等が堆積し、溝跡、1号木組遺構、土坑、トチ塚が分布する。

なお、調査区中央部をクランク状に走る2号溝跡は上記の泥炭層を切り、弥生時代後期～古墳時代初頭に比定される。



図16 第4次調査風景

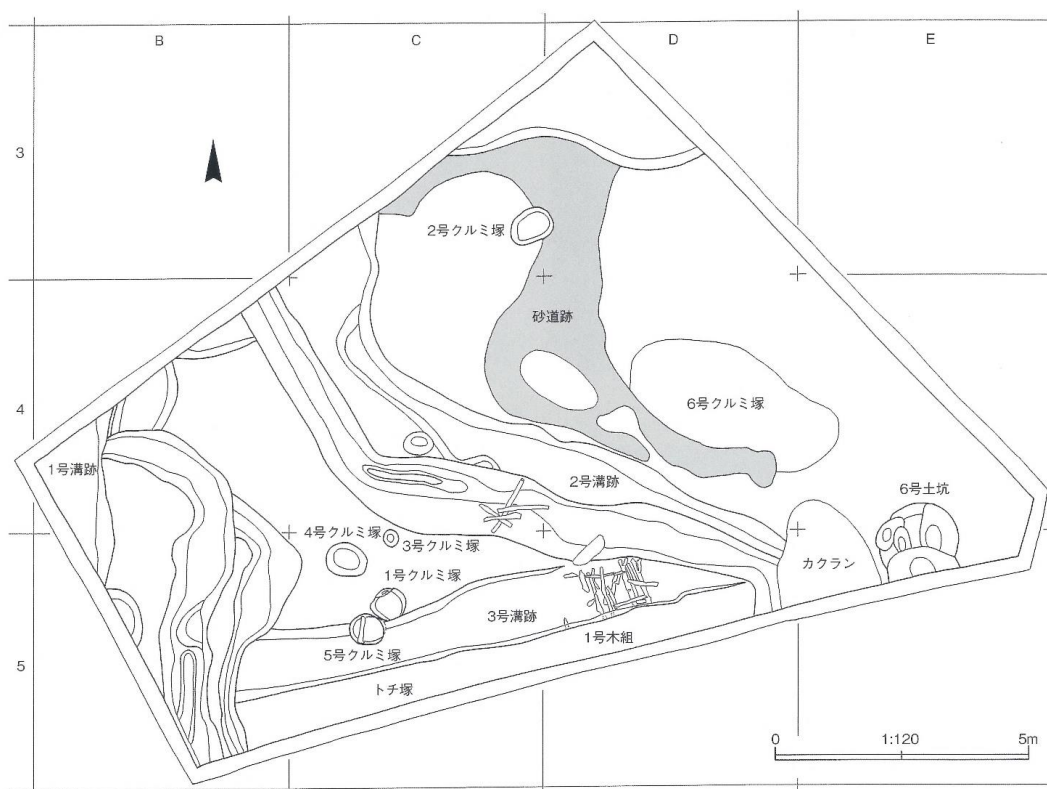


図17 第4次調査区の主な遺構と遺物

2 縄文時代中期の遺構と遺物

(1) クルミ塚

クルミ塚は縄文時代中期の遺構として最も顕著なもので、1号～6号の6基が検出された。分布は調査区南側のC5グリッドに4基が集中するほか、北部のC3グリッドに1基、東部のD4グリッドに1基が分布する。形態は直径40cm～70cmと小規模で、皿状または円筒状に掘り込むもの、または長径で4mを超えるものがある。いずれも人為的にオニグルミの核を主体に廃棄しており、他に土器類や微細な植物遺体を含んでいる。

1号クルミ塚(図18・19)

C5グリッドに位置し、3号溝跡に南部を切られる。規模は70cm×65cmの円形プランで、皿状に掘り込んでおり、オニグルミの核を137点、加曽利E1式土器片を包含していた。

2号クルミ塚(図18・20)

C3グリッドに位置し、重複する砂道跡とは同時期である。IIa層からIa層中に掘り込み、規模は90cm×65cmの楕円形プランで皿状を呈する。オニグルミの核を262点、勝坂3式土器片、木胎漆器片を包含していた。

3号クルミ塚(図18・21)

C5グリッドに位置し、4号クルミ塚は至近である。規模は40cm×25cmと最も小さく、明確な掘り込みはないが、クルミ集中の下位は若干窪んでいる。オニグルミ核を109点包含する。

4号クルミ塚(図18・22)

C5グリッドに位置し、1・3・5号クルミ塚とは至近である。規模は81cm×62cmの楕円形プランで、深さ10cmとわずかに掘り込んで皿状を呈する。オニグルミ核を553点包含する。

5号クルミ塚(図18・23)

C5グリッドに位置し、3号溝跡に上半部を切られる。規模は70cm×62cmの円形プランで、深さ38cmと円筒形を呈する。オニグルミの核を472点、漆塗土器5点を包含する。

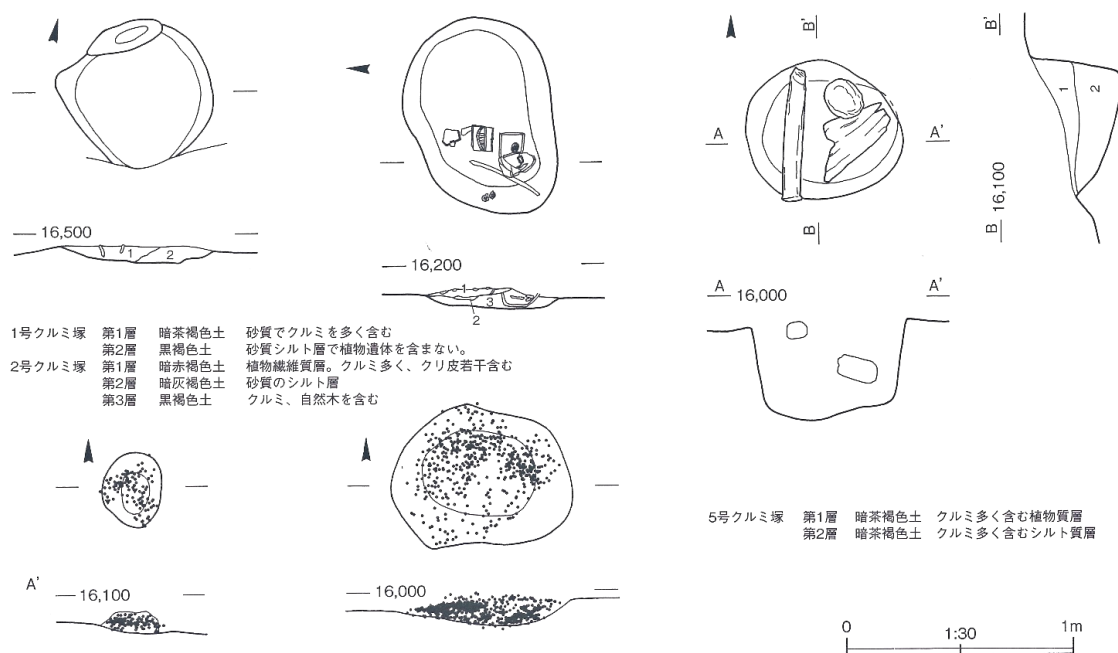


図18 1号～5号クルミ塚

6号クルミ塚 (図24)

D4・E4 グリッドに広がり、砂道跡の北側に接している。規模は4.8m×2.5mの楕円形を呈し、基盤のIV層を掘り込んでレンズ状に堆積する。ただし、周囲にもクルミ核は広範に分布しており、遺構の境界を特定することは困難である。中央部の堆積層は4層に分層され、年代分析では最下層の4層は縄文時代中期中葉、最上層の1層で中期中葉～後葉という結果であった。堆積層からは土器類の出土が多く、北西部からはクルミ形土製品が出土しており注目される。また、オニグルミ以外の植物遺体では、アズキ亜属・クワ属・キハダ等の出土が認められた。



図19 1号クルミ塚



図20 2号クルミ塚



図21 3号クルミ塚



図22 4号クルミ塚



図23 5号クルミ塚



図24 6号クルミ塚

(2) 漆製品 (図 25~33)

調査区から出土した土器のうち特徴的なものは漆塗土器である。破片が多く全容を窺わせるものは少ないが、器形のわかるものはいずれも浅鉢で、加曾利 E1 式を主体とする傾向にある。大半は黒漆を下地とし、赤漆でモチーフを描いており、隆帯に赤漆を塗布して文様を際立たせるものと (1~6・8・9) 平滑な器面に赤漆で大胆なモチーフを描出するもの (7・10・11) とに大別される。また、図 31 は土器の底部を漆のパレットに転用したものと想定され、器内面に硬化した漆と外面にタケササ類の繊維を籐 (たが) 状に巻き付けていた痕跡を残す。なお、図示していないが赤漆を塗布した小礫のほか、木胎漆器では螺鈿状の装飾部 (図 32) と漆塗杓文字 (しゃもじ) 柄部 (図 33) の断片も出土している。

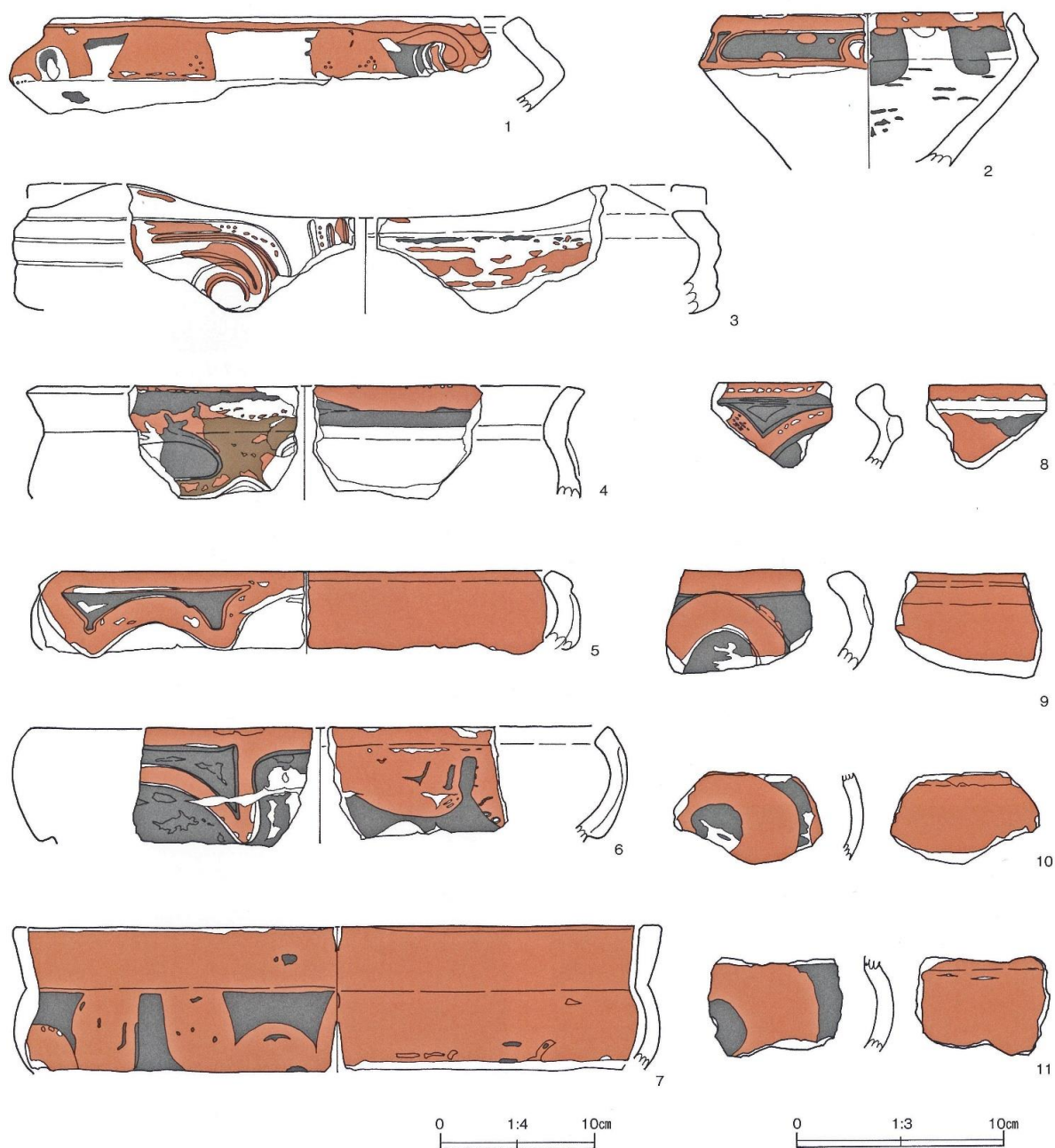


図 25 漆塗土器



図 26 漆塗土器出土状況 (図 25-2 他)



図 27 漆塗土器出土状況 (図 25-5)



図 28 漆塗土器出土状況



図 29 漆塗土器出土状況



図 30 漆塗土器出土状況



図 31 漆塗土器出土状況



図 32 木胎漆螺鈿部出土状況



図 33 漆塗杓文(2号クルミ塚出土)

(3) 土製品・石製品(図 34・35・36)

調査区から出土した土製品及び石製品は図 34 に示した。土製品の中で注目されるのは 2 点のクルミ形土製品である。ともに縫合線の表現から半割したクルミを模したものと想定される。1 は 6 号クルミ塚から出土したもので、爪形文を連続してモチーフを描き、内面には漆塗膜が認められる。2 は棒状の工具で沈線を螺旋状にめぐらせモチーフを描く。

3 は臼形の土製耳飾、4 は玦状の土製耳飾で約半分を遺存する。また、5 は手捏土器、6 は滑石製の白玉である。7 は大珠で、蛍光 X 線分析によりヒスイ製であることが明らかである。

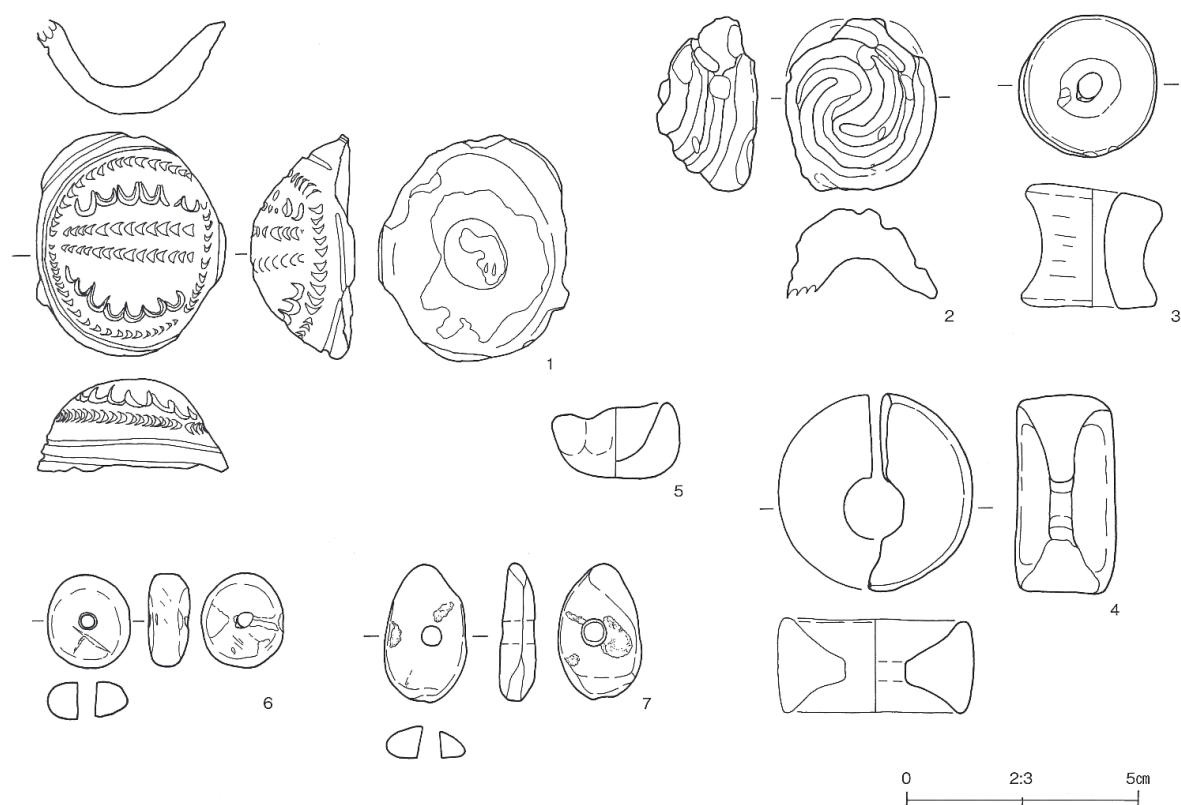


図 34 土製品・石製品



図 35 クルミ形土製品出土状態 (図 34-1)



図 36 ヒスイ製大珠 (図 34-7)

IV 各種分析の概要

第1節 植物遺体

1 クルミ集中区から出土したクルミ

デーノタメ遺跡では、縄文時代中期後半の6か所のクルミの殻が集中する箇所（クルミ塚）が検出されたほか、縄文時代後期の土坑や木組み、弥生時代後期～古墳時代前期の溝などからもクルミの殻が出土した。遺構出土のクルミは、破片まで含めると11,894点（完形個体換算数で3,145点）にのぼる。遺構ごとの内訳（図37）をみると、縄文時代中期中葉の6号クルミ塚から約半数が出土し、ついで縄文時代後期前葉の溝状遺構（SD3）から多く出土し、弥生時代末～古墳時代前期の2号溝状遺構（SD2）以外、縄文時代中期～後期にクルミが頻繁に利用されていたことがわかる。出土したクルミのなかには、完形個体のほかに、人間が割ったとみられる打撃痕を持つ破片や、リス類やネズミ類などのげっ歯類の歯形が残る動物食痕の破片がみられた（図39）。

クルミの利用は、深さ38cmの土坑状の遺構

である縄文時代中期中葉～後葉の5号クルミ塚に特徴的にみることができる。約170点（完形個体換算数）のクルミの中で、完形個体はほとんどなく、大半が1/2ないしそれ以下の破片であった。大半（67%）は打撃痕か動物食痕をもち、土坑内に埋まったクルミは廃棄されたか周辺から流れ込んだものが大多数であったと考えられる。長軸約4.8m、短軸約2.5mの縄文時代中期中葉～後葉の6号クルミ塚では、約1,591点（完形個体換算数）が出土し、300点以上の完形個体の他に、打撃痕や動物食痕を持つ破片がほぼ同じ割合（461点と650点）であった。完形個体のクルミが多数出土していることから、廃棄されたクルミと自然堆積したクルミが混ざっていたと考えている。上記の5号クルミ塚や6号クルミ塚以外でも特定の形状のクルミが堆積した遺構はみられなかった。

クルミにはオニグルミと亜種のヒメグルミがあり、出土したのは99%がオニグルミであった（表2）。打撃痕をもつオニグルミ469点を、割った面を上面にした状態で欠損部位を7つに分けて集計したところ、頂部86%と底部75%に欠損が集中した（図38）。これは、縄文時代の人々が、クルミよりも硬い道具を使用して、上下方向からの打撃によってクルミを割って中身を取り出していたことを示している。東京都下宅部遺跡（佐々木・工藤2006）や埼玉県南鴻沼遺跡（目黒ほか2015）でも同様の傾向がみられた。

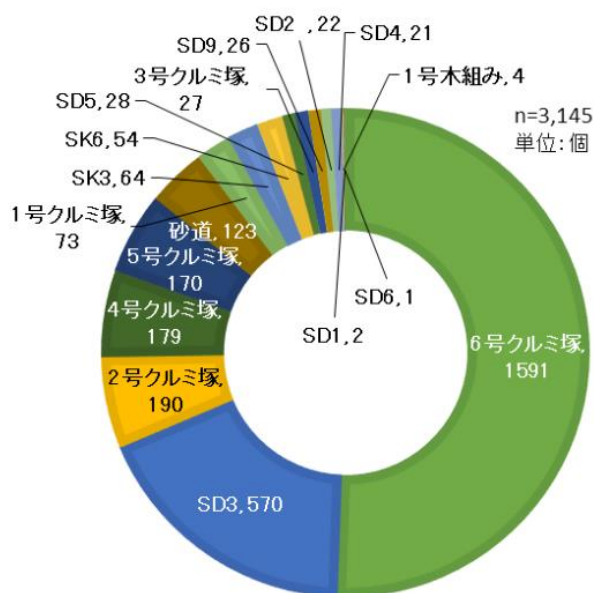


図37 遺構から出土したクルミの個数

遺構から出土した完形個体のオニグルミ 366 点の長さを計測した結果、遺構ごとにばらつきがみられた (図 40)。大多数は長さ 25~40 mm の範囲に収まるが、2 号クルミ塚や SD3 からは 45 mm を超える個体が出土した。時代でみると縄文時代中期のクルミの長さは 19.4~46.2 (平均 31.8±4.46) mm、後期の長さは 23.4~46.1 (平均 32.5±4.27) mm と、平均値では後期のものがやや大きかったが、遺跡周辺に様々なサイズのクルミが存在したことが推定された。

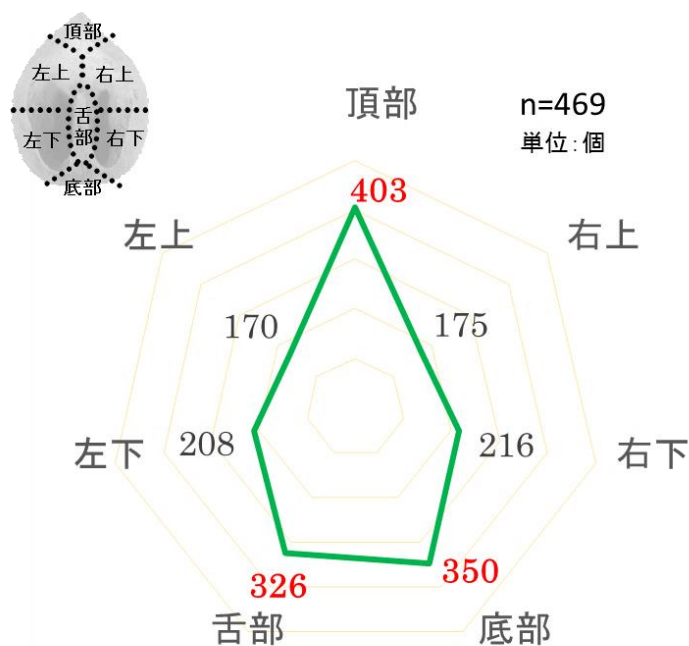


図 38 オニグルミ核の欠損部位

表 2 デーノタメ遺跡から出土したクルミ (痕跡別)

遺構	時期	オニグルミ										ヒメグルミ										合計 (個)
		完形		1/2						1/2 未満	完形		1/2						1/2 未満			
		痕跡 なし	動物 食痕	自然の 割れ	打撃痕 炭化	動物 食痕	動物 炭化	打撃痕	不明	3.6gで 個体換算	痕跡 なし	動物 食痕	自然の 割れ	打撃痕 炭化	動物 食痕	動物 炭化	打撃痕	不明	2.6gで 個体換算			
1号木組み	後期	1				1		2					1						4			
1号クルミ塚	中期	1				13		26		33									73			
2号クルミ塚	中期	44	5			23	11	49	4	52	1						2	1	190			
3号クルミ塚	中期		1			5		6		16									27			
4号クルミ塚	中期	5	4	2		15		88		65							2		179			
5号クルミ塚	中期	15	3	1		47	1	61		44									170			
6号クルミ塚	中期	161	169	45	39	470	9	414	33	236	2		1	1	2		7	3	1,591			
SD1	中期		2																2			
SD2	縄文	2	3	1		4		9	1	3									22			
SD3	後期	12	90	6	1	188	2	140	8	115	1	2	1		3		1	1	570			
SD4	中期	1	5			9		3		3									21			
SD5	中期	1	2	1		5		15	1	5									28			
SD6	中期									1									1			
SD9	中期	1	3			1	6	1	10	4		1							26			
SK3	中期	3	8			7	13	1	18	1	11	1			1	1	1		64			
SK6	後期	6	13			15		14	1	6								1	54			
砂道	中期	8	8	1	1	56	1	13	3	32								1	123			
合計 (個)		260	317	55	49	866	25	864	49	625	5	3	2	1	6	0	11	5	4,145			

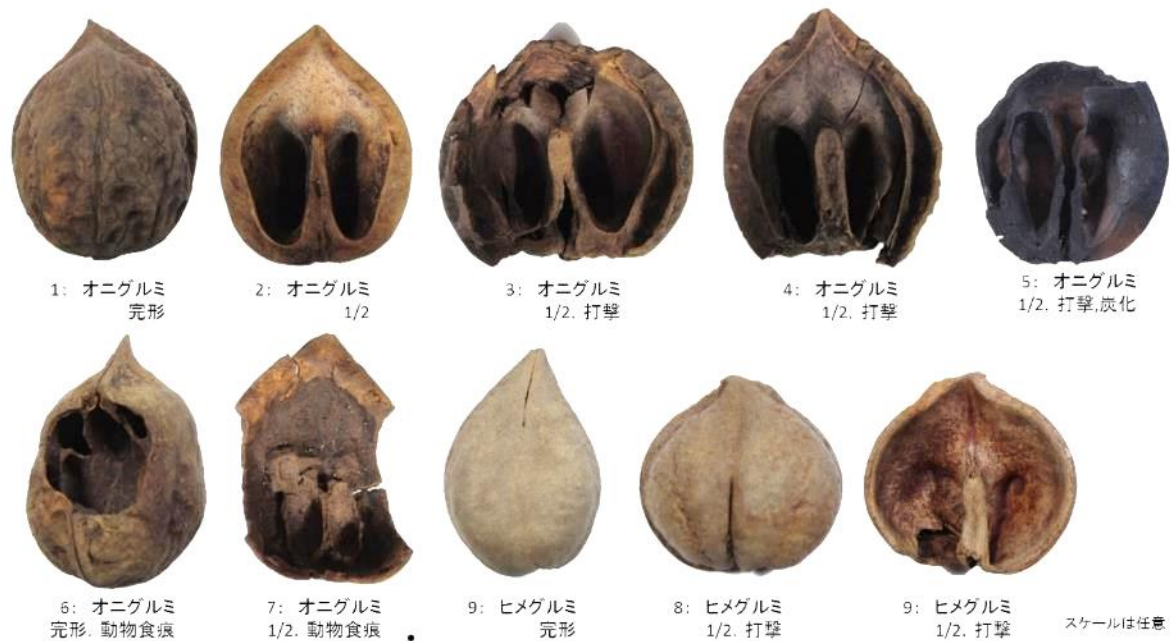


図 39 デーノタメ遺跡から出土したクルミ

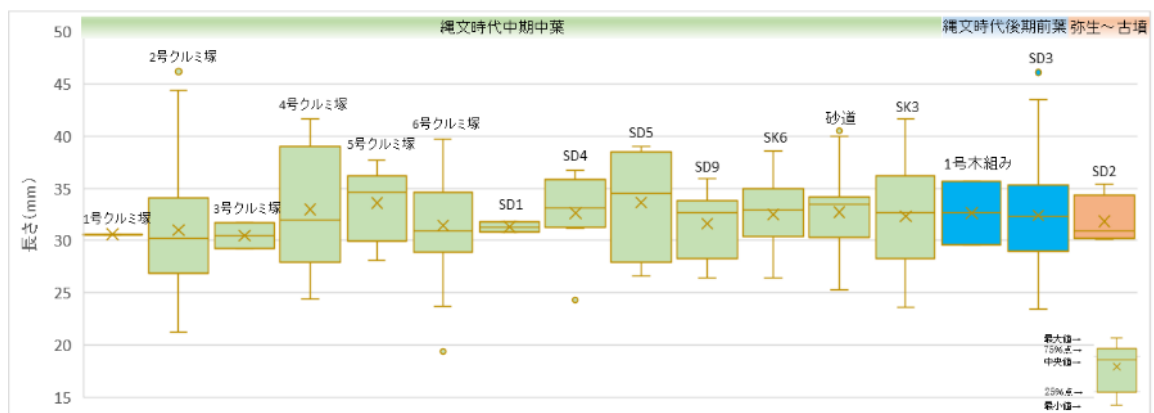


図 40 デーノタメ遺跡から出土したクルミの長さとはらつき

引用文献

佐々木由香・工藤雄一郎 2006 「大型植物遺体」『下宅部遺跡 I (1)』183-222 頁、東村山市遺跡調査会
目黒まゆ美・佐々木由香・バンダリ スタルシヤン 2015 「南鴻沼遺跡出土の大型植物遺体」『南鴻沼遺跡 (第1分冊)』173-187 頁、さいたま市遺跡調査会

目黒まゆ美・佐々木由香 (デーノタメ遺跡調査指導委員会)

V デーノタメ遺跡の特質と重要性

第1節 ―森と水辺に展開した巨大集落の実像―

北本市に所在するデーノタメ遺跡は、台地上の居住域とその直下の低地部が調査された稀有な遺跡である。しかも台地上に残された居住域は 60,000 m²にも及ぶ範囲の中に多数の竪穴住居跡が広がることから、関東地方最大級の集落遺跡と考えることができる。ここではこれまでの調査の成果として3つのポイントに絞り、その重要性について説明したい。

1 約1,200年にわたる人々の生活の舞台

台地上の集落部分は大きく中期中葉から後葉までの住居が集中する地点と、それに隣接して後期初頭から前葉の住居群が集中する地点から構成されている。さらに中期の住居群の内側に後期中葉の住居が複数発見されていることから、集落は隣接地を反復するように移動していたことがわかる。これらの集落からは、都合10型式余りの土器型式がほぼ連続して途切れることなく出土しているため、炭素年代を用いた結果、デーノタメ集落は約1,200年にわたる人々の生活が行われたことがわかった。この事実は縄文時代が高度な定住社会を形成していたことを示す重要な証拠である。

こうした長期間にわたる人々の居住活動を示す遺跡は東日本の縄文社会に特徴的に認められる。その中でもデーノタメ遺跡が注目されるのは、集落の形成期間が中期の中葉から後期中葉にまで至ることである。関東地方の多くの遺跡は中期と後期の間に断絶を挟み、2つの時期の集落が同一の場所に形成されることは非常に少ない。また後期の遺跡数が減少することから、中期と後期の間に気候寒冷化などの大きな環境の変動があり、大きく文化が衰退されたと考えられてきた。ただしこの解釈は十分な検証がなされているわけではなく、縄文時代研究の最重要課題の1つである。

デーノタメ遺跡は中期と後期にわたり継続した居住活動が認められることから、各時期の居住形態を検討することにより、この課題に答えを導くことができる。

2 低地部に保存されている豊富な植物遺存体の出土

一方、台地の下には良好な泥炭層の堆積が確認されている。また、花粉分析ではウルシの花粉が検出されているため、周囲にウルシ林が存在したことが考えられる。クルミやドングリなどの堅果類も豊富に出土しており、当時の食生活の解明に重要な資料である。

また中期の泥炭層の上には後期の泥炭層が一部で重なり合って検出されている点は重要である。とくに後期ではトチの果皮が厚く堆積した地点が確認されている。これらの堆積物は、ちょうど台地上の集落の形成時期とも一致しており、集落直下での低地利用の実態が初めて明らかにできる貴重な事例である。

近年の研究の進展により縄文人の主食は堅果類などの植物質食料であることが人骨の安定同位体を用いた古食性分析などから明らかにされている。しかし、台地上の集落では炭化しない限り、ほとんど遺存することがない。動物資源は貝塚の動物遺存体の分析から詳細が明らかにされているが、主食の内容は不明確なままであ

った。デーノタメ遺跡の泥炭層は多くの植物質食料の残滓を出土しており、また花粉やプラント・オパール分析から植生復元も可能であるため、縄文時代中期から後期にかけての環境変化とそれに適応した人々の活動痕跡が良好に保存されている点で極めて重要である。

3 5,000 年前の漆文化の実態解明

低地部が調査で当初から話題を呼んだ遺物の 1 つに中期の漆塗土器がある。デーノタメ遺跡の場合は浅鉢形土器の内面に赤色と黒色で文様を描くものが多い。漆は台地上ではバクテリアや紫外線によって劣化してしまい、ほとんど残存しない。泥炭層はそうした遺物を良好に保存する環境を形成している。

縄文時代の漆利用技術の中で関東地方の中期は漆工芸技術の 1 つの画期ともいえる。一方で東日本最大級の集落として著名な青森県三内丸山遺跡では、漆塗りの製品は極めて乏しく、明らかにこの時期の漆工芸技術の中心が関東地方にあったことを示している。しかも、その主体は土器に漆で文様を描く陶胎漆器である。出土した資料には複数の漆文様の描き方があり、また赤色顔料の塊やウルシの花粉も検出されていることから、デーノタメ遺跡ではウルシ林を管理し、そこから樹液を採取して漆工芸を担う人々が存在した可能性が高い。

漆塗土器の理化学分析を行うことにより、約 5,000 年前の漆工芸技術の実態が解明できる。

4 期待される遺跡の保存と活用

デーノタメ遺跡は台地上の大規模な居住域とそれに付随して利用された低地の泥炭層が一体となり良好な状況で残されているきわめて稀有な遺跡である。今や遺跡は住居などの居住域だけではなく、周囲の利用空間をも含めた範囲の保存と活用が望まれてきているが、そうした条件を満たす遺跡は極めて少ない。デーノタメ遺跡はその稀有な候補の 1 つと言って良い。

これまで関東地方の縄文時代遺跡は生業復元の手がかりの多い海浜部の貝塚遺跡が多く保存されてきたが、デーノタメ遺跡は海浜部には見られない内陸部での豊かな生活の実態を伝えるものであり、東日本の縄文時代を代表する遺跡の 1 つと考えることができる。

阿部芳郎（デーノタメ遺跡調査指導委員会委員長・明治大学教授）